特集4/研究農場便り（寒締めホウレンソウ）

寒締めホウレンソウ新品種「雪美菜01（ゆきみなゼロワン）」の紹介

特性と栽培の要点

雪印種苗株式会社
園芸作物研究グループ
野菜研究チーム　主任
本多 範久

4

1.はじめに

近年、「ちぢみホウレンソウ」とうたった“寒締めホウレンソウ”が普及し、“ちぢみ”と“食味（甘み）”を強調する販売方法によりスーパー等で目にすることも多くなりました。

今秋より販売しました寒締めホウレンソウ新品種『雪美菜01』（系統番号:雪ー910）は食味、耐寒性、収量性に優れた寒締め専用の縮み系ホウレンソウで、べと病レース1～7、9に抵抗性を示し、生育・収穫期間が長く寒締め品種として最適です。ここでは、本品種の特性および栽培の要点についてご紹介致します。

2.新品種『雪美菜01』特性

1）食べておいしい縮み系ホウレンソウ“えぐみ少なく、甘い!!”

「寒締め栽培」とは、秋にホウレンソウを収穫可能な大きさまで生長させた後、寒気に当てて糖分などの栄養成分を高める栽培方法です。冬に寒風に当てながら、約100～120日をかけて栽培することで強い甘みが生まれます。本品種は、糖度の乗りが非常に良く、食味の良さと縮みのある草姿で差別化商品としてご利用頂けます。

▲写真1『雪美菜01』の草姿

2）生育はじっくり、耐寒性に優れ、濃緑・肉厚の多収種!

気温がやや温暖な時期にも、生育がゆるやかで収穫適期の幅が広く、在圃性に優れます。また、寒さによる葉柄の傷みや葉の劣化が少なく耐寒性に優れます。極濃緑で照りがあり、葉肉が厚いため退色しにくく、やや葉先が尖る広葉の中間葉種です。葉数が極めて多く開張性で株張りが良いため収量が上がります。

3）べと病に強く、作りやすい!

耐病性は多湿条件で発生する‘べと病’に対しレース1～7、9の抵抗性を持ち、べと病の汚染地域でも安心して利用できます。また、アブラムシによって媒介されるウイルス病についても比較的強く、栽培しやすい品種です。

▲写真2　草姿（露地栽培）:千葉県

▲写真3　草姿（露地栽培）:群馬県

3.栽培の方法

1）北海道・東北・高冷地の場合

①ハウス栽培を基本とし、主に『9月中旬～9月下旬まで』播種されたものが対象となります。それ以降の播種では低温により十分生育できず、収量が上がらない場合があります。
収穫時期は十分に低温に当たった『12月中下旬～3月中旬』になります。

②栽植密度は条間20～25㎝、株間10㎝の1粒播きを基本とします。極端な厚播きでは生育の強弱が出るので注意します。

③露地栽培の標準施肥量は10a当たり成分量で窒素15kg、リン酸15kg、カリ15kgが目安ですが、ハウス栽培ではそれぞれ8～10kg程度に減肥します。

④糖度を乗せるため、収穫可能な大きさに達した段階で、凍害に気を付けながら、ハウスの両サイドを50㎝程度開けて外気にさらします。開放は風向きに対する考慮も必要ですが、基本的に両サイドを開放します。

▲写真4　栽培風景（露地栽培）:栃木県

栽培作型

●：播種期　▬：収穫期

地　域	作　型	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
北海道（道南・道央）	ハウス									
東北・高冷地	ハウス									
一般地	露　地									
	ハウス									

▲写真5　栽培風景（ハウス栽培）:岩手県

▲写真6　草姿（ハウス栽培:マルチ）:岩手県

表　　裏　　商品

▲写真7　葉先を（紙筒等で）裏側に折り返す

2）一般平坦地の場合

①露地栽培を基本とし、主に『9月中旬～10月上旬まで』播種されたものが対象となります。それ以降の播種では低温により十分生育できず、収量が上がらない場合があります。収穫時期は十分に低温に当たった『12月中下旬～3月中旬』になります。

②栽植密度は条間20～25㎝、株間10㎝の1粒播きを基本とします。極端な厚播きでは生育の強弱が出るので注意します。

③露地栽培の標準施肥量は10a当たり成分量で窒素15kg、リン酸15kg、カリ15kgが目安ですが、ハウス栽培ではそれぞれ8～10kg程度に減肥します。

4. 収穫・調整方法

1）葉長が20㎝前後のもので、糖度が基準値以上であることを確認した上で収穫します。

2）株元から切り取り、下葉・痛んだ葉を取り除きます。

3）厚紙や厚手のビニールを下に引き、その上に3～5株（1袋200g以上の場合）を開いた状態で根（株元）がある方を上して中心で重ねます。

4）厚紙を筒状にし、ホウレンソウの葉先を裏返すようにまとめ、袋に横詰めで入れます。（写真7）

5）紙筒を袋から抜き取り、新葉が袋表面の中心部分にあれば、袋を閉じ完成です。

5.栽培の要点

1）ハウス栽培（主に北海道・東北・高冷地）

①12月上旬よりハウス内温度を10℃以下に保つよう心掛けます。それ以上になると生長するため寒締めの効果（糖度上昇）が薄れます。10℃以上になってしまった場合には開放期間を延長し糖度を高めてから収穫します。

※「最高最低温度計」を設置しハウス内気温を確認して下さい。

②最大葉の葉と葉柄部分で糖度を測定し「基準値以上」のものを適期収穫します。

③2月中旬以降は日照が増えるので温度が上昇しやすく、ホウレンソウが生長し糖度が急激に低下しやすいので注意します。

④収穫前日は午後にハウスを閉めておくと凍結を抑えられ作業がしやすく、また、収穫当日は凍結部分が融ける10時以降に行うと、茎折れも少なく、品質も良好です。

2）露地栽培（主に一般地）

①無理な遅播きだと、十分生育できず小株のまま寒気に当たるため、糖度がのらず、収量も上がらないので、保温が難しい露地栽培では播種期を厳守することが大事です。

②ホウレンソウは過湿に弱いため、冠水し、水が抜けない畑に関しては、排水対策を行う必要があります。排水不良による発芽ムラ、生育不揃い等を避け生育を揃えるため、ベットは高く（10㎝以上）します。

③暴風雨や台風の降雨等で土壌表面が固まることがあります。土壌表面が固まると、ホウレンソウの根が傷み、生育が停滞します。棒などで条間に筋を入れ、浅く耕起する中耕作業を行うことで土を柔らかくし、根の伸長、生育を促すことができます。また、中耕と併せて、生育停滞の回復のため、追肥を行います。

④栽培期間が長く、また降雨や積雪等のある露地栽培では収穫後半に、葉色が淡くなりやすいので、12月中旬～1月下旬にかけて数回追肥を行い、肥料切れしないよう注意します。

⑤栽培期間が長いため、鳥による食害のおそれがあり、寒冷紗等の被覆資材を利用するか、テグスや反射紙を利用し、鳥を近付けないよう努めます。

⑥3月上旬以降は温度が上昇しやすく、ホウレンソウの糖度が急激に低下しやすいので注意します。最大葉の葉と葉柄部分で糖度を測定し「基準値以上」のものを適期収穫します。

6. おわりに

今回、ご紹介した『雪美菜01』は食味、収量性に優れた作りやすい寒締めホウレンソウです。栽培のポイントを十分注意して頂き、品種の特性を発揮させ、良品を安定出荷させることを期待します。